

# 提 案 書

## 市民にとっての市庁舎

～「シティホール」をめざして～

平成22年9月21日

特定非営利活動法人いいた応援ネット アイデア まちなか研究会

## 市民にとっての市庁舎 ～「シティホール」をめざして～

特定非営利活動法人いいだ応援ネットイデア まちなか研究会

### 【はじめに】

私たちNPOいいだ応援ネットイデアは、人づくり・まちづくり・地域づくりの推進に取り組むグループとして、有志により中心市街地のまちづくりを考える「まちなか研究会」を立ち上げ、まちづくりの課題についてテーマ設定し、研究と提言を重ねてきました。今回は市民にとっての市庁舎建設の意味を考え具体的に提言させていただきます。

市庁舎は「シティホール」と欧米では呼ばれており、市民の生活に密着した広場、大広間、集会場であり、地域の誇りの象徴と共に市民の心の拠りどころになっていると聞きます。あたかもそこで働く人（市職員）とそこを訪れる人（市民）を二分するイメージを持つ「シティオフィス」ではなく、まちづくりについて共に語り合い、共に取り組むイメージの「シティホール」と呼ばれているのがうなずけます。

新しい市庁舎が私たち市民にとってどのような市民益を生み出すのかという論点について、分かり易く深める必要があると考えます。飯田市では平成27年完成を目指して市庁舎改築計画を進めています。最近では市庁舎改築について、経済界や個人からの意見書が提出され、まだまだ論議が必要であることが認識されました。

市庁舎整備事業基本計画でこれまで決定された内容は、現庁舎は耐震補強して再利用し、駐車場となっている現庁舎の西側の敷地を箕瀬通りまで拡張、新庁舎を建設するとしています。現庁舎を再利用し、工事中も仮庁舎を設置しなくて済む建設方法はよく練られた案であると思います。また、8月の市議会開会における市長挨拶では、市庁舎を必要最小限の規模とする旨の発言がありました。

必要最小限と市民益としての機能の両立を追求する必要があります。そこで、私たちは①市民と行政の垣根を越えてともに明日の飯田市を創り上げていく“広場”＝「シティホール」としての市庁舎 ②周辺の地域と新たな街並みを形成していく市庁舎 ③社会生活における公共的役割を行政ばかりでなく多様な民間主体＝「新しい公共」が担うことを促進し、それらを見据えた上での「必要最小限」の市庁舎について考察し方向性を示します。

市民にとっての市庁舎のあり方についてオープンで前向きな議論を今からでも始めませんか。

### 1. 【多様な主体による協働のまちづくりの場として】

市民と行政の垣根を越え明日の飯田市をともに考え、実行に移し、見直し、熟成していく場を創造することが市民益としての市庁舎改築と考えます。第5次飯田市基本構想基本計画で「多様な主体が参画するまちづくり」を掲げる誇り高い飯田市が建設する市庁舎

のあるべき姿です。そのためにはより開かれた空間づくり、気軽に訪れやすい雰囲気と機能を周到に執務空間の周りに配置する必要があると考えます。

**ある脳科学者による**“事務的な仕事をつかさどる脳はほんのわずかの中心部分に過ぎないが、周りを取り巻く部分を人との交流や交歓によって鍛えることで、仕事の結果が良い方向に大きく変わって行く”という言葉には思い当たるところもあります。

**立場的にも建築自体としても**市民と行政・議会等がお互いの目線の高さにずれがなく、しなやかで真剣な交流と協働の中でこそ、共に知恵や感性が高められ、良い仕事が残せるものと思います。

**市民窓口のあり方**としては、各地区の自治振興センターの窓口は総合的でありコンパクトでかつ利便性が極めて高く、本庁舎においても自治振興センターを参考にすべきと考えます。市民に対するワンストップサービスも検討されていますが、ワンストップサービスの基本は、来庁した市民が迷ったりたらい回しにならないための、サービスを提供する職員の姿勢にあるのではないのでしょうか。そう考えると、これまで述べてきた「シティホール」の考え方こそが、本質的な意味でのワンストップサービスではないかと考えます。

**NPO や市民団体がさまざまな市民活動を担うと同時に行政を補完**することで、きめ細かな行政サービスの実現が可能となります。耐震改修する現庁舎の新たな再出発には、1階に市民活動団体の事務所が軒を並べるなど、“飯田らしい”生き活きとした使いみちがふさわしいと思います。また、さまざまな市民活動のたまり場機能を持つ「まちづくりカフェ」ができれば、いくつになっても社会の役に立っていることを実感できる生涯現役社会を実現するまちづくりの拠点となることでしょう。

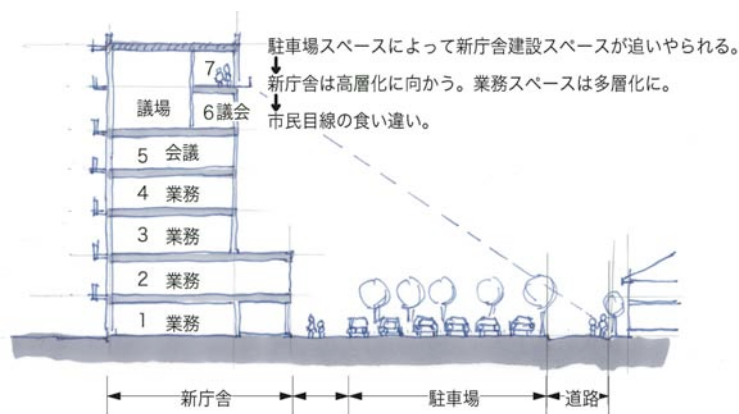
**「人形劇のまち飯田」にふさわしく人形劇舞台を備えた多目的ホール**を市民にとっての市庁舎の目玉として提案します。小さくても劇人であれば一度は公演したいと思うような回り舞台式が理想です。議場についても、議会会期中以外の期間における市民や海外から訪れるゲストの多目的使用が可能となるのも望ましいと考えます。さらに外部にはオープンスペースとしての市民広場を提案します。それはヘリポート、避難スペース等の用途も兼ねるわけですが、普段は本格的な屋外劇場として使用します。

**さまざまな都市機能の連続性があることが良い街の基本**です。観劇の後に食事をしたりお酒を交えて余韻を楽しんだり、特に多くの人を訪れるきっかけを生み出す文化施設は街の中にあることが理想です。市庁舎と同年代に建設された文化会館も近い将来、全面的な改築が求められることを考えれば、来るべき改築に備え、市庁舎改築の計画にあわせて配置を考慮しておくことが肝要です。市庁舎に文化会館が併設されることで「カルチュラル・シティホール」が誕生し、大きな市民益が生まれます。また、その様な大きな時間スパンで飯田らしいまちづくりを連続して考えていくことがこれからのストック型社会を築いていく要と考えます。

## 2. 【街並みを意識した低層の建築物に】

環境文化都市と呼ばれるにふさわしいまちづくりを先導する市庁舎を創造

しなければならないと考えます。ともすれば、広い駐車場の奥に7・8階建ての本庁舎。



『駐車場の中に建つ高層市庁舎』

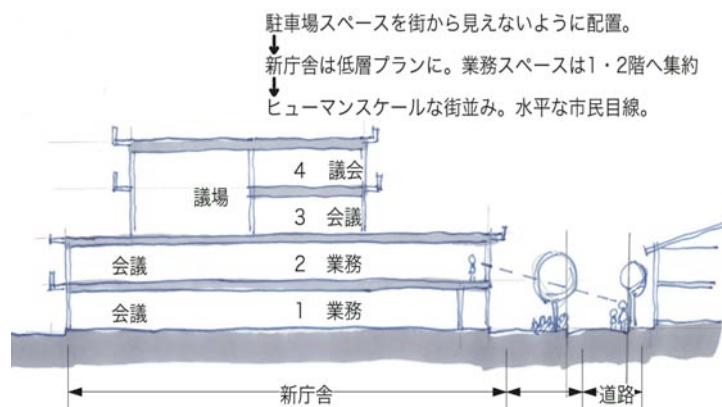
孤立した箱型の中高層建築。駐車場が敷地を埋め尽くし、片隅には申し訳程度の植栽。人は車に遠慮しながら来庁する・・・というようなイメージがつくられていくのかもしれませんが。事実、最近このようなイメージで改築された他市の庁舎も見受けられます。

周辺の街並みに最大限配慮し、既存の街並みからあまり離さずヒューマンスケールの家並みを生み出す「低層プラン」を提案します。箕瀬側は石畳みの通りに改修し、庁舎も箕瀬側は低層の町屋の顔づくりをして飯田らしさを表現します。これからは庁舎に天守閣のような高い建物を求める時代ではありません。

市庁舎の駐車場は通りからは目につかないよう配慮する必要があります。ヨーロッパでは街並みに駐車場が見えないように努力しています。車がずらっと並ぶ光景は風景にはなりえないからです。バリアフリー駐車場は玄関近くに用意するとしても、通りからは目につきにくい地下利用（敷地の高低差を利用した半地下構造を含む）もしくは自走立体駐車場も検討しなくてはなりません。

『低層プラン』では、市民が訪れやすい1，2階に業務空間を集約します。

ほとんどの執務スペースが収まることとなります。将来の各部署の変化に対応しやすいこ



『親しみやすい低層プランの市庁舎』ヒューマンスケールな街並みの創出

ともメリットとなります。人と人との繋がりも縦ではなく横水平になっていきます。ただし、このような一体的空間においては、残業時の空調や夜間の市民利用に対するセキュリティの確保などには工夫が求められます。

環境面での配慮も必要です。緑の庁舎として外部空間での緑の量を視野の50パーセント以上とする目標を設定することを提案します。省エネ・新エネ機器や高効率機器等の導入は必要なことですが、機器に頼るのではなく、きちんと庇を出し、西日を遮るなど、建物自体の環境基本性能を高めることや、太陽熱・太陽光・地中熱・バイオマスといった自然エネルギーを取り入れることが基本です。当地域で得られる木材をはじめとする自然環境資産、当地域の環境産業で生産される資機材を最大限利用すべきです。

### 3. 【新しい公共による行政サービスの展開】

人々の社会貢献への意向は近年高まりを見せ、個人、NPO、企業等の多様な民間主体が、私的な利益にとどまらない公共的な役割を担っていく機運が高まっています。これまで、市民生活における公共的な役割は、主として市役所が担ってきました。しかし、今後の人口減少や将来的にも厳しいと予想される財政状況、高齢化等を背景に求められるものを踏まえると、市民一人ひとりのニーズにきめ細やかに対応していくには、行政だけでは限界があります。

庁舎改築をきっかけにNPO等の民間団体と行政が相互にしなやかに連携し、知恵を出し合い協働することで、従来行政が担っていた公共的な領域、公と私の間隔的な領域まで活動を広げる仕組みづくりに踏み込むべきです。

その仕組みは当然、市庁舎の形となって見えてきます。庁舎建設を「必要最小限に抑える」とする市長発言は的を得たものと思います。市の敷地に建設する庁舎はできるだけ小さくすべきです。しかし新しい公共を含めた多様な行政サービスに対応する「庁舎機能」の一部については、できれば市庁舎から人が行く気になる歩行距離800mの範囲内にある民間の建築ストックを活用することで、幅広く展開していくことが重要です。はじめは市職員が対応せざるを得ない分野であっても、いずれは民間が担うことを想定することが重要なのです。このことが世界に誇りうる「飯田市の多様な主体による協働のまちづくり」であると考えます。

具体的には、庁舎改築のような大きな新規投資を伴う公共事業については、設計、資金運営計画の段階から「官民が連携する」PPP (Public-Private Partnership) の手法を積極的に取り入れ、その中で行政と市民が協働し未来を創造する仕組みをつくりあげるべきではないでしょうか。

### 【おわりに ～リニア時代に向けて～】

南信州広域連合ではリニア将来構想会議を重ね、来るリニア時代に向けた準備を始めています。リニア新幹線によって私たちが本当の意味での物心両面の恩恵にあずかるには、今から“都心に一番近い日本一の田舎”を目指したまちづくりを進めていく必要があると考えます。これは市長の語る「小さな世界都市飯田」の創造にもつながるものです。

飯田の玄関となるリニア駅から見える風景でそのまち全体の雰囲気は伝わるはずで

行政と市民が一丸となってあらゆるプロジェクトを飯田らしい風景と飯田らしい仕組みの創造に向けて積み重ねていくことが最重要です。

これまでも飯田市は、環境、デザイン、まちづくり、コミュニティの在り方などの分野で存在感を示してきました。今後予定される一つひとつのプロジェクトについても、世界に冠たる地方都市「飯田」を築き上げるために取り組むべきであり、そのことによって市民に大きな誇りと幸福という至高の市民益をもたらすと考えます。

動き始めた市庁舎建設という大きなプロジェクトは今後の飯田市を占う試金石なのです。